

『戦国三代と天下人 芦田（依田）氏の軌跡から』（市村到著）を読んで

成澤文和（4組）

4組同級生の市村到君による640ページに及ぶ力作『戦国三代と天下人』は彼が二十代後半から今日までの四十数年に及ぶ間に資料を蓄積して整理まとめたものと記述があった。彼の持前の粘り強さがまさに集大成となった訳であり、頭が下がる思いである。

内容を要約すると、ここで言う戦国三代とは武田信玄臣下であり、信濃先方衆（先方衆とは文字通り戦の場合先頭に立って戦う部隊である）で真田氏と両翼を担った佐久の依田信蕃（のぶしげ）を中心に父の信守、子の康国、康真兄弟の三代のことである。

又その時点での天下人とは武田信玄、徳川家康、織田信長、豊臣秀吉、徳川將軍家のことであり、それぞれとの関係を描いている。

私が依田信蕃を初めて知ったのは新田次郎の『武田勝頼』全三巻の特に第三巻の中で駿河田中城の城主であった時で、武田の御親類衆筆頭の穴山梅雪（この頃既に徳川方への内通を決めていた）により徳川方への加担を命じられ、やむなく従ったことである。

更に信蕃は真田昌幸を一時的にせよ徳川方へ加担させたことも大きな功績となり、家康から多大な信頼を得た。

このまま行けば本来ならば佐久で城持ち大名として残るはずだったが、北条の残党狩りの最中、佐久の岩尾城攻めで討ち死にした為、長男康国へと受け継がれた。康国は徳川の支援を受けて小諸城主として7年間佐久を統治したが、小田原の役で豊臣軍と西上州の北条方を攻めた折、不意を突かれて落命する。

次男の康真は家康の関東移封に伴い、上州藤岡藩主となるが、些細なことから旗本を斬殺した結果、藤岡藩は改易、領地は没収となる。

その為家康の次男松平秀康預けとなり、前後四代の福井藩主に仕え、最後は城代家老となる。福井での二代目以降は姓を「芦田」に復し、明治時代になり佐久郡芦田村へ帰還した。

戦国時代武田の信濃先方衆として名を馳せた依田信蕃の子孫が福井で脈々として生き残り活躍したことを初めて知り、又驚きであった。

更にこの本で福井（越前）真田氏存在を知ったことも大きな収穫であった。

長篠の戦いで真田昌幸の兄である信綱と昌輝が討ち死にした為、昌輝の長男信正は当時二歳で昌幸が引き取ったが、昌幸は関ヶ原の合戦後九度山に配流となり、信正は後に松平忠輝（家康の六男）に召し抱えられたが忠輝改易となり、松平忠昌が1618年高田藩主を継ぐと信正は600石を得て家臣に。4年後、越前に移った忠昌に信正も従ったとされる。

以来昌輝－信正の家系は「福井（越前）真田家」として現在まで福井で続いて来たことを知り、これも又驚きであった。

2023年には北陸新幹線が福井まで開通するので、機会があれば歴史好きな同期と当地を訪れたいと思っている。（2021年1月13日記）